

## 「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部3年 丹羽功貴

大学の講義でフィリピンの移民問題について学び、またその一環で京都市内の中学校で JFC に対して学習支援ボランティアを行う中で、移民女性たちが過酷な労働環境の下で働いていたり、JFC たちが日本社会に統合することや日本語学習の困難さに直面したりしていることを学んだ。なぜ、苦しい環境で生活しなければならないにもかかわらず、彼女たちは日本に移住するのか、それほどまでにフィリピンでの生活が劣悪なのか、疑問を抱くようになり、フィリピンの生活環境や労働環境を実際に目で見て学びたいという思いを抱き、今回のフィリピン研修に臨んだ。実際にこの研修を通してフィリピンの社会構造の歪みを目の当たりにし、また同時に、日本社会の矛盾に対しても自覚的になった。

フィリピンに来て印象的だったのは都市の発展の様子だった。街のいたるところに高層ビルが立ち並び、メガモールが数多く建てられていた。これらの建築物はフィリピンの経済発展を象徴しているようだったが、それと同時に、高層ビルのすぐそばではストリートチルドレンが外国人観光客に物乞いをしており、路上で寝ている人もいた。研修中に訪問したアジア開発銀行でもお伺いしたが、フィリピンでは経済発展しても中流、下流階級の人々はその恩恵を受けることができず格差が広がる一方だという。フィリピンの社会構造が人々の目標の達成や自己実現を阻んでいると考え、なんともやるせない気持ちになった。特に衝撃的だったのは、物乞いをしていたストリートチルドレンが仲間たちと楽しそうに遊んでいる様子だった。今日を生きるのに必死であるにもかかわらず、笑顔で過ごすことができるストリートチルドレンを自分の中でどう理解すればいいのか大きな戸惑いを感じた。それだけではなく、マニラで暮らす人々は苦しい生活環境の中で過ごしているにもかかわらず、彼らは笑顔を絶やすことはなく、楽しそうに過ごしていた。なにかにつけて楽しさを見出そうとするフィリピン人の国民性とはいえども、彼らの笑顔をどう受け止めたらいいいのか分からなくなることが多々あった。

そして、こうした経験を通して、日本はフィリピンに比べて物質的にはるかに豊かな国であるにもかかわらず、そこでは常に何かに縛られた環境の中でつらさを感じながら人々が生活しているという矛盾について改めて考えさせられた。日本人として生活している私は物質的には不自由なく暮らしているが、どれほどの時間フィリピンの人々のように笑顔で過ごしているのか問い直すと、「幸福」とは一体何なのだろうかという疑問を抱かざるを得なかった。

研修中、外国に出稼ぎに行く労働者や外国人と結婚して外国に渡航する人々に対して、カウンセリングやレクチャーを実施している CFO (Commission on Filipinos Overseas) にて、日本に渡航する予定の女性たちにインタビューを行なった。彼女たちは主に結婚移民として日本に移住する予定であるのだが、インタビューした女性たちは日本人の結婚相手と 10 回も会っていない人が大半であった。さらに彼女たちは主として 20 代だったが、結婚相手の日本人男性は 4, 50 代が一般的だった。たった数回しかあったことがないにもかかわらず結婚を決めた彼女たちに対する衝撃は大きく、あまり深く考えることなく結婚を決めているから日本に移住した時に苦労を重ねることになるのかと考えたが、何よりも違和感を抱いたのは、彼女たちが自分の結婚相手のことをすごく嬉しそうに話してくれたことだ。彼女たちの話には結婚相手との確かな愛があるように感じ、男女間の愛や結婚とは一体何なのか問い直さざるを得なかった。

今回の研修で、移民問題を取り扱う CFO などの政府機関や DAWN、BATIS、マリガヤハウスといった NGO などを訪問し、それぞれの立場から移民や帰国者をサポートしていることを学んだ。特に実感として強かったのは、こうした移民にまつわる問題が今まさに繰り返されているのだということだった。日本では、移住してある程度の期間を経た人とはしか関わることができなかったが、CFO では間もなく渡航する予定の女性たちと関わることができ、訪問先の NGO では進行中の問題に対して取り組んでいる活動に触れることができた。日本とフィリピン間で起きている移民問題はこれからも続くものだと再認識し、私自身、こうした問題に対して常に向き合っていかなければならないのだと痛感した。

実際にフィリピンに足を運ぶことで、移民問題を今まで以上にリアルに感じることができた。さらに、フィリピンでの移民問題の

実態に触れることで、移民問題が日本やフィリピンがそれぞれに抱える問題ではなく、2 国間にまたがって発生しているのだと理解することができた。また、フィリピンの社会の歪みを目の当たりにし、何か私自身がこの問題の改善に貢献しなければならないと感じ、今回の経験を今後の学習や将来設計に生かしていきたいと考えた。

最後に、今回のフィリピン研修を調整、サポートして下さった安里准教授、KUASU の皆様、CFO の職員の方々に厚く御礼申し上げます。多くの方々の支援によって研修に参加できたことに感謝し、これからの学問活動に励んでいきたいと思えます。ありがとうございました。